風邪（かぜ）考

小林千草

現在、「風邪」と表記され、鼻・喉・気管などの上気道にカタル性炎症を生じる「かぜ」の用例は、古く、竹取物語や源氏物語に「風いと重き人」「かぜおこりて」のような形で見出される。源氏の「かぜおこりて」は、「瘧が起こる」「頭痛が起こる」と同じ用法であるが、同書には、「しはぶる人ともも、すすろはしくて、はま風をひきありく」のように、現在よく使われる「風を引く」という表現も見出せる。宇津保物語の「風ひき給てんとてさわぎふせたてまつり給つ」には格助詞が略されているので、「風を引く」の確例にはならないが、文明～天文年間（一四七七～一五三四頃）の抄物を見ると、

①男根ヲキルモノハ身ニ風カツヨフヒイテ寒ホトニ蠶ヲ養所ノヤウニヌリマワイテ風ノ不レ入様ニシテ暖所ニ火ヲ置テソコニ宮刑ノ者ヲ置ソ（京大本史記抄十一14ウ）

②ソコニハヲリナイ　風カヒキ候（両足院本神代上下抄二50オ）

③馬事東風ト云ハ馬ハ耳ニ風カヒク事ヲイヤカリテ風カ耳ニ入レハ頭ヲフルソ　サル程ニカシラフリスル事ニ馬耳ノ風ト云ソ（古活字版四河入海十八の四10オ）

④ロニ風ノ引ニ返事シテノ用ハト云タル顔ヲシテイタゾ（寛永版中華若木詩抄中47ウ）

の如く、「風が引く」が散見される。例④の「風ノ引」は、当時の格助詞「ノ」と「ガ」の関わりから、「ガ」に準じて考えられる。また、①③④は、「風邪」に冒される部位を示す語（〜）を伴っているのが注目される。これは、おそらく、「風邪という病気をもたらす風の神が、人の体を自分の方に引きつけて取り込んでしまう」と発想した上での表現で、当時の俗信が根底にあるように思われる。この「風邪をもたらす厄病神」の文献上の例は、『人倫訓蒙図彙』の「世間に風気時流ぬれば、風の神をおひはらふとて面をかつぎ、太鼓を打て物をもらう」で、近世期にずれこむが、俗信は中世辺りから生じていたものと考える。「かぜの神を送る・かぜの神送り・かぜの神払い」も、その俗信の表われである。

また、「名ガ付く」と「名ヲ付ク」の相違とも似通っている。「名ガ付ク」の場合は、名前そのものに神秘的霊力があり、その霊が人に添う感があり、「名ヲ付ク」の方は、名前をツケル主体である人間（親・祖父など）を中心に見た言い方である。

医学の抄物を検するに、日用月用能毒之捷径（一五六八年成立『国語史への道』所収本）では、

⑤身アツクシテホトヲリ痘疹イテカヌルニ風ヲヒキ熱気シテ頭痛スルニ（6ウ）

⑥ニワカニ風ヲヒキコミ頭痛スルニ風脚ヲカシテ頭ヲモク鼻フサカルニ婦ノチノミチニ風イリテ頭痛スル（35ウ）

の如く「風ヲヒク」が五例出るのに、「風ガヒク」の用例はない（他に、「風ニ破ルル」「風ニ犯サルル」「風入ル」の表現がある）。

病論俗解集（寛永16年版）でも、

⑦風水（フウスイ）カセヲ引テハルヽコト（31ウ）

⑧酒後ニ風ヲ引ケバ肝ノ病トナルモノ也（49ウ）

など三例の「カゼヲヒク」に対して、「カゼガヒク」の用例はない（他に、「風ヲ得（ウ）ル」「風（風邪）（ガ）入ル」の表現がある）。時代を近世に下った病名彙解（蘆川桂洲著）でも、「風ガ引ク」の用例はなく、「風ヲ引ク」四例のほか、「風（風邪（ふうじゃ））ヲ受クル」九例、「風邪（ふうじゃ）乗ズル（入ル）」七例「風邪（かぜ）（ふうじゃ）ヲ被ル」一例「風邪（ふうじゃ）ニ感ズル」二例など医学用語としてのバラエティーに満ちている。

中世の俗語の世界を代表する狂言（虎清本・虎明本を調査）では、「カゼヲ（ガ）引ク」という語は見当らず、かろうじて名詞としての「かぜ」が見出されるのみ（虎明本狂言「酒かうのしき」）である。風邪を引いた状態など、狂言のテーマとはならなかったようである。俗文に目を向けると、醒睡笑に「歳の暮に風を少しひきければ」が出るものの、

⑨かぜ大事におはしまし候しときの事ども（恵信尼消息　古典大系82　222）

⑩かざ心ちすこしおぼえて、その夕さり（ゆふ）より臥して大事におはしますに（同右223）

⑪のちには、よるひる、あせをのみ、なかしけるほとに、くすしをよびてみせけれは、つかれに、風のそふたるなりとて、れうぢをそ、くわへにける（一尼公さうし　室町時代物語大成二266上）

⑫きたのかた、風の心ちありけるに（岩屋の物語　大成二482上）

⑬めのとのわかさ、かせのこゝちとて、なやみけるを（七草ひめ　大成十209上）

⑭母をかれがもとに置きてやしなはせけるが、有る時風のこゝちとて痛はりければ（略）げにも風気（かぜけ）とみえてければ、さるべき医師をつけて療治をくはゆるほどに（室町殿物語　東洋文庫1　149）

のように、「風（かざ）（かぜ）のここち」「風気（かぜけ）」を主体にした表現が多く、医者の診断が出る前は「風邪気（かぜ）味」を使う我々の日常生活と似通っている。

日葡辞書には、「Fûja」「Canbô」が、「カゼ」の意味で登録されているが、そのポルトガル訳の示すように、その概念は、今言う「カゼ」よりも広い。この語は、「風病（ふうびょう）（ふびょう）」と同じく、頭痛・四肢の疼痛や異常感覚・運動障害などの症状を広くさしている（時に、ウイルス性の発疹もさす）。同書の「感冒」は、サ変動詞としてのものであり、「風邪ニ感冒スル」（病名彙解）の例で知られる如く、「カゼヲ引ク」の意味に極限されてはいない。「風邪（ふうじゃ）」「風気（ふうき）」「感冒」は漢語であるが、現代中国語では、カゼは、㈠西洋医学で見たてると「感冒」、中国医学で見たてると「傷風」㈡傷風は、その原因によって、「風寒」（寒気・湿気のために起ったカゼ）「風熱」（夏カゼ）に大別される。㈢普段のことばとしては、「感冒」を使い、「我感冒了」と表現する（中国人留学生楊雲氏談）そうである。